

京都市 令和元年度完了報告書

1. 調査研究概要

本年度は、本市の強みである、小中一貫教育や家庭・地域等との連携をもとに、学校教育目標の実現に向けて、自校の教育活動の質を最大限に高めるため、各実践校において、各研究テーマ（a・b・c）を一体的に捉えつつ、「育成を目指す資質・能力」の具現化に向け、業務改善等の学校運営上の工夫を盛り込んだ、カリキュラム・マネジメントの実証的な取組を推進している。具体的には、「校内体制」「年間計画」「目的（テーマ）」はもとより、「具体的な実践・検証の方法」「児童生徒の変容の見取りを視点にしたPDCAサイクルの手法」「働き方改革につなげる仕組みづくり」を明確にした取組となるよう、実践研究を進めてきた。

実践校においては、学校ビジョンや目指す児童生徒の姿が、教職員と児童生徒との間で共有化されるとともに、資質・能力ベースでの授業改善が一定図られてきているものの、教職員間での意識差や、中学校区単位での小・中学校間での温度差などがみられる。また、カリキュラム・マネジメントの実践が、授業改善や児童生徒の変容にどのようにつながっているのかを評価することの困難さ、評価基準の妥当性等も、各校の共通課題である。授業改善においても、資質・能力を常に意識した授業づくりの困難さ、逆に、資質・能力の育成を意識するあまり、本来の教科・単元目標とのズレが生じるケースも散見されるなど、多様な面から課題が浮き彫りとなっている。

こうした、本年度の実践を踏まえた成果や課題を実践校で共有するとともに、教職員一人一人がカリキュラム・マネジメントを意識できるための工夫や、アンケート等の実証的な数値に加え、具体的な声や姿を生かして、児童生徒の変容をどのように見取るのか（評価項目・基準のあり方等）など、引き続き、効果的な実践を蓄積し、次年度末の「カリキュラム・マネジメントの手引き」にまとめていきたい。

(実践地域における年間実施スケジュール)

月	取組内容
5月	○各校で本研究に係る推進委員会等を組織／研究の方向性等の共有
6月	○校内研修等による研究の推進
7月	○カリキュラム・マネジメント検討会議委員からの研究の方向性の助言等 ○全国学力・学習状況調査 児童生徒質問紙の分析 ○カリキュラム・マネジメント全市研修会（全小・中・小中学校対象）
8月	○全市研修会を踏まえた、各校での校内研修
9月	○各校で公開授業や研究発表会等を実施
10月	○児童生徒質問紙と関連性をもたせたアンケート、保護者・地域アンケート等を実施
11月	○各校での取組進捗状況の確認（中間報告）
12月	○カリキュラム・マネジメント検討会議
1月	（総括、成果・課題の分析、新たな教育実践や展開方策等の提案・確認・共有等）
2月	
3月	検討会議を踏まえた、課題等の振り返り及び次年度計画の構想

2. 調査研究の内容

実践校【京都市立葵小学校】

(1) 研究テーマ

- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

(2) 調査研究の内容

- 保護者代表にも参画いただく「葵戦略会議」での議論をもとに、学年会を中心に育成を目指す資質・能力を「人間関係力」「自己評価力」と設定し、毎週の学年会で取組の共有化・見直しを進めるなど、PDCAサイクルの循環を図る。
- 学年ごとに重点教科・重点単元を設定し、「人間関係力」「自己評価力」をベースとした関連単元配列表を作成したうえで、職員室に提示するなどの可視化、常に見直すサイクル化を図る。
- 話し合いや対話の時間を核とした授業改善、1年間の振り返りを書き留めるワークシートなど、「人間関係力」「自己評価力」を効果的に育成する手法の研究を深める。
- 客観的に児童の変容を見取れるようにするため、教職員が作成したルーブリック（あおいGlid）を児童と共有化したり、児童自身がルーブリックを作成したりするなど、わかりやすい評価基準を設定する。

焦点化した児童にインタビューを行い、その中で語られた文脈について、評価指標と照らし合わせて評価する。

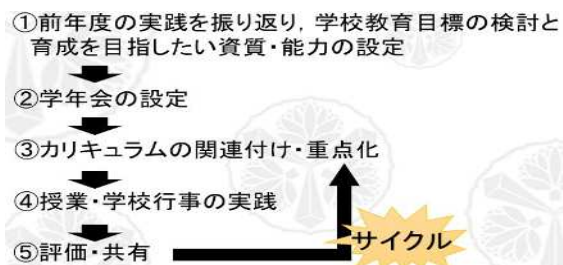
☆あおいGlid☆

段階	ステップ1 低学年 1～2年生	ステップ2 中学年 3～4年生	ステップ3 高学年 5～6年生	
目標	自分や自分の成長を振り返り、自分の成長を認識し自分軸をもつ			
目標設定	・自分軸にしたいことがある。	・進捗に課題を認識することができ る。	・課題を克服し前向きな行動を果 断することができる。	成長過程 の振り返り
気づき	・発言や行動が自分軸に合った ものである。	・周囲の状況や状態を踏まえて考えるこ とができる。 ・自分の行動や考え方をどのように 表現するか考えることができる。	・課題を解決するための方法を考 えられる。 ・課題に合ったパフォーマンスを 発揮することができる。	自分の 成長を 振り返 る
振り返り	・失敗を恐れず挑戦する。	・最後まであきらめず振り返り続け る。	・失敗や困難を乗り越え次の行動に 取り組むことができる。	自分の 成長を 振り返 る
成長力	・自分軸にしたいことがある。 ・自分軸に合った行動や考え方を 実践することができる。	・自分軸に合った行動や考え方を 実践することができる。 ・自分の成長や考え方を振り返り ることができる。	・一人ひとりが自分の目標に向かって 進んでいることを認め合っている。 ・課題の中で自分の長所を生かし、 リーダーシップを発揮して成果を出 している。	自分の 成長を 振り返 る
振り返り	・これまでの学習を振り返り自分の 成長や課題を振り返っている。	・自分軸に合った行動や考え方を 実践している。	・自分軸に合った行動や考え方を 実践している。	自分の 成長を 振り返 る
振り返り	・自分の成長や考え方を振り返り ることができる。 ・自分の成長や考え方を振り返り ることができる。	・自分の成長や考え方を振り返り ることができる。 ・自分の成長や考え方を振り返り ることができる。	・自分の成長や考え方を振り返り ることができる。 ・自分の成長や考え方を振り返り ることができる。	自分の 成長を 振り返 る
振り返り	・自分の成長や考え方を振り返り ることができる。 ・自分の成長や考え方を振り返り ることができる。	・自分の成長や考え方を振り返り ることができる。 ・自分の成長や考え方を振り返り ることができる。	・自分の成長や考え方を振り返り ることができる。 ・自分の成長や考え方を振り返り ることができる。	自分の 成長を 振り返 る

【評価指標】※詳細別紙

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

- ・関連単元配列表の作成・可視化に加え、毎週の学年会で共有化・見直しを行うことで、P D C Aサイクルを組織的に進めることにつながり、学校全体で取り組む雰囲気醸成につながった面がみられたが、学年ごとの意識差も明らかになった。



【学年会の様子】

- ・対話の時間のカリキュラム化，ルーブリックの児童との共有化により，学習活動のめあてがより明確になり，児童が主体的に学習する姿が見られたり，しっかりと振り返りをする姿が見られたりした。
- ・ルーブリックの共有化には一定の成果がみられたが，評価基準に不明確さが残り，児童の変容を見取る指標として適切かどうかが見えにくいなどの課題が残った。また，児童の成果物に対する評価に多様性を欠いたため，そもそもルーブリックによる評価手法と合わない場面があった。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
6月	ビジョンを共有し，学年会を設定する。学年による研究のスタート。
7月	あおい Glid を作る。
8月	関連単元配列表を基に取り組みを見直し修正する。対話の時間研修会
9月	ルーブリックの授業研究① 対話の時間研修会 保護者と教職員の対話
10月	ルーブリックの授業研究②
11月	ルーブリックの授業研究③
12月	関連単元配列表を基に取り組みを見直し修正する。対話の時間の研修会
2月	研究発表会
3月	次年度に向けて，学校教育目標や育てたい資質・能力を見直す。

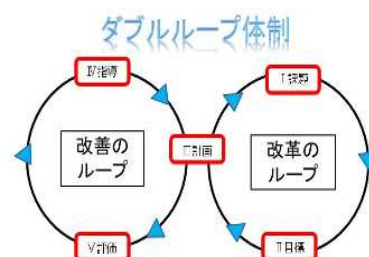
実践校【京都市立太秦中学校】

(1) 研究テーマ

- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

(2) 調査研究の内容

- ・校内に「カリマネ推進委員会」を設置するとともに，教科等横断的な視点の中核となる「総合的な学習の時間」を充実させることを目的に「総合推進委員会」を設置する。また，組織的かつ計画的な取組の推進を図るため，「改善のループ」と「改革のループ」を同時に回す「ダブルループ体制」を組み，教育実践の質の向上のための P D C A サイクルの確立を図る。



- ・すべての教育活動で言語能力の育成を意識するため、学年会や教科会で意見交流するなど、全教職員で関連単元配列表を作成し、職員室に掲示するなど可視化を図る。
- ・カリキュラムの中心は「総合的な学習の時間」とし、各教科で身に付けた「言語能力」が「総合的な学習の時間」で活用・発揮されることを目標とする。また、学校行事や生徒会活動、道徳・人権教育などでも「言語能力」の育成を意識した取組を実施する。
- ・「地域とともにある学校づくり」を目指して、校下小学校やPTA、近隣施設等との連携・協働をさらに広げていくための取組を計画・実践する。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

- ・すべての教職員が学校教育目標や育成をめざす資質・能力を常に意識し、同じベクトルで取組を進める体制・雰囲気ができつつある。また、生徒・教職員ともに随時、振り返りやアンケートで「改善」と「改革」のループを回すことが日常となっており、生徒の姿や教職員・生徒アンケートからも、ある程度研究の成果は出ている。
- ・資質・能力を意識した授業改善はまだまだ道半ばである。関連単元配列表は作成・可視化したものの、改善・見直しにまで至っていない。今後、思考ツールやピクトグラム等を活用し、ねらいや手法を教科間、生徒と教職員間で共通化するとともに、発問の工夫、一人で思考する時間の設定、振り返りシートの改善等に取り組む。

【関連単元配列表】

- ・小中連携や近隣施設との連携に課題を残した。小中主任会や合同研修会等の教職員間はもとより、作品展や美化活動、キャリア・パスポートなど児童生徒間での連携強化を図る。また、カリキュラムの中心である「総合的な学習の時間」において、校区内の太秦映画村、広隆寺、蚕ノ社等の協力を得た活動を展開していく。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
6月	学校教育目標・育成を目指す資質能力・研究主題の共有 小中主任会 小中合同研修
7月	授業アンケート実施 研究報告会に向けて指導案作成開始
8月	夏季小中合同研修 学プロ及び授業アンケート分析・各分掌中間反省会
9月	関連単元配列表中間点検
10月	研究報告会に向けての最終調整, 研究報告会実施 (小中合同研修も兼ねる)
11月	研究報告会反省会
12月	授業アンケート実施 独自テスト分析
1月	授業アンケート分析 生徒会オープンスクール
2月	年度末反省会
3月	関連単元配列表の見直し

実践校【京都市立向島秀蓮小中学校】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

(2) 調査研究の内容

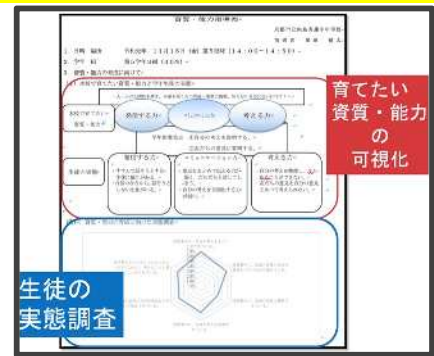
- ・特に研究で焦点化する資質・能力を「発信力」「コミュニケーション力」「考える力」の3つに設定し、校内のあらゆる場で意識できるように目標等を掲示して可視化するとともに、すべての教職員でKJ法等を用いながら、最優先に達成したい姿を話し合い、年度当初の児童生徒の実態を比較して、学年指導重点を設定する。
- ・3つの資質・能力を育成するための方向性を明確にするため、学習指導案で以下の4つの点に特徴をもたせる。



① 3つの資質・能力を育成するための学びであることを明確化するため、「〇〇科指導案」→「資質・能力指導案」と名称変更する。

指導案の1ページ目で研究の方向性を表現

② 学習指導案では、学校教育目標、3つの資質・能力、学年指導重点、児童生徒の実態を記載し、付けたい力を明確にすることを授業づくりの起点とする。



③ 系統的なカリキュラム編成を目指し、9年間のつながりを学習指導案の中に示すことで、担当学年の学習と授業学年の学習の関連性の把握・理解につなげる。

④ 授業中の対話的な学びについて、ピクトグラムで表現するなど、ビジュアル化（可視化）を図るとともに、クリティカルシンキングの活動場面に「クリティカルシンキングポイント」マーク、特に生徒の様子をよく観察してほしいポイント「参観者eyes」マークを記載する。

言語活動を軸とした対話的な学び・思考T	クリティカルシンキングの学習活動	評価の視点
	多面的・多角的な視点 ④-1	関心・意欲・態度
	メタ認知	書く能力

ピクトグラム

クリティカルシンキングポイント

CT

参観者 eyes

CT: 新しく気付いたことを付箋に貼ります。例をまじり、カウフンで目立つので、たかさんの人形を貼る。ハートの形は何を表しているのだろう。多んでいる感じがするね。

参観者 eyes: 4. グループでまだ空からないことがあれば全体で確認する。

クリティカルシンキングポイント: 新しく気付いたことがあれば付箋に書き、例をまじり、カウフンで目立つので、たかさんの人形を貼る。ハートの形は何を表しているのだろう。多んでいる感じがするね。

参観者 eyes: 友達の顔と自分の顔について気付いたことを全員で話しているか。

- ・資質・能力を明確にした授業作りや、教育活動を俯瞰的にマネジメントする力の向上を目指す校内研修として、資質・能力に対しての検証を軸とした研究協議、研究全体の方向を確認する場としての「向島秀蓮の研究について語ろう会」等、自校の強みを生かした研修の場を設定する。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

- ・本研究では、学校教育目標を達成するための6つの資質・能力のうちの3つ（「発信力」「コミュニケーション力」「考える力」）に焦点化したことで、教職員の意識が「教科の研究」ではなく「本校の生徒に必要な資質・能力を育成する研究」であるとシフトチェンジできた。

- ・授業研究会後の30分間の「向島秀蓮の研究について語ろう会」は、方法も内容も短時間で実りある形となった。教職員の声でも「短い時間でも学びが大きい」「改めて本校の研究について、今取り組んでいることの意味を再確認できた」などが挙がっている。

事後研究会のタイムテーブル 授業終了 10分～15分後からの動き

時間	内容
15分間	小グループでの協議 ○付箋をもちり、PMIの表を用いての話し合い ○各学年の育てたい資質・能力に即した話し合い
25分間	全体協議 ○学校長の話 ○授業者より ○全体協議
30分間	指導助言
25分間～30分間	向島秀蓮の研究について語ろう会
5分間	○学校長の話

- ・児童生徒は2回、教職員は1回のみアンケートを行ったが、詳細な分析ができず、生かすきれなかった。児童生徒自身の自己評価の継続的な実施や、研修会での明確な位置付けなど、計画の歯車に予め組み込むことであると考えらる。
- ・今年度は学年部を中心にして、3つの資質・能力を育てるための研究を行っていたために縦の繋がりが弱かった。次年度は9年間の教科部会とステージ部会を中心に研究を進めて、3年後に独自カリキュラムを完成できるように進めることとする。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
6月	資質・能力の共有 授業への意識実態調査① 学年重点の決定と計画の共有
7月	関連単元配列表の縦と横の繋がりを確認・訂正
8月	重点の中間評価
9月	授業への意識実態調査② 学年実践の共有
11月	研究発表会 学年実践発表 研究発表会までの研究の中間総括
12月	教職員の授業への意識調査
1月	研究の年間総括アンケート実施
2月	研究部 年間総括分析 次年度への課題を把握
3月	年間総括及次年度の活動方針を決定・共有 教科部会発足

3. 実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

(○：成果，●：課題)

○学校ビジョンや目指す資質・能力の可視化の工夫等により、教職員間・児童生徒間で具体的に共有されることで、研究実践に向かう教職員の意識向上に加え、めあてや振り返りの充実、授業の意義や意味を感じられることによる児童生徒の主体的な学習意欲の向上、確かな自信・有用感の醸成などが図られている。

○各教科等において、単元や授業を通じて、いかに資質・能力を育成するかという意識が根付いてきている。対話的な場面等についても、漫然と授業に取り入れるのではなく、効果的な場面設定などについて、教科会等で積極的に協議が行われるなど、授業改善、学校組織の活性化につながってきている。

○カリキュラム・マネジメントが目的化せず、カリキュラム・マネジメントによる有機的な組織のあり方の検討が進められている。

○資質・能力を考察する際に、小中9年間での「目指す子ども像」の共有の重要性を認識することで、小中一貫教育を通じた児童生徒の丁寧な実態把握の必要性を再確認した。

- カリキュラム・マネジメントに対する教職員一人一人の意識差が大きい。成果のフィードバックの工夫など、教職員が有用感を保てるための取組へと発展させることが課題である。教職員の意識改革にあたっては、校長からのトップダウンではなく、人材育成の視点から、ミドルリーダーや若手教員によるボトムアップ型が望ましいと考えている。
- カリキュラム・マネジメントが効果的なものとなっているのか、評価基準や指標の設定について、その妥当性を含め、課題が多い。児童生徒の変容した姿を成果として、「見える化（評価項目の設定にあたっては、児童生徒の言葉に近づけることやピクトグラムの活用など単純化・可視化できる環境を整えるなど）」することや、ルーブリックの作成・活用など、多面的に研究を進めていきたい。
- 資質・能力を意識するあまり、本来の教科・単元目標とズレが生じるケースも出てくるなど、そのバランスをうまくとることが課題である。汎用的な資質・能力の育成と教科・単元目標は必ずしも一致しないため、各授業はもとより、内容のまとまりでみることを深めるなど、単元構想を大切にしていきたい。
- カリキュラム・マネジメントは既存の取組や組織を生かしつつ、その質の向上を図り、教育課程を核に授業改善と組織改革を一体的に行うものであるとの方向性のもと、実践校での事例を築盛し、全市的な体制づくりを進め、広く共有化していきたい。

4. 参考資料（※いずれも別添参照）

- ①令和元年度各教科等教育課程研究協議会（総則部会） 京都市発表資料
- ②カリキュラム・マネジメント検討会議資料